オーラルヒストリー・インタビューから見る日中通訳者の規範形成

平塚ゆかり
（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程）

This paper studies interpreting norms held by Japanese-Chinese interpreters, focusing specifically on their "professional norms" to see if their actual practices adhere to their norms or deviate from them. The research method employed for this purpose is oral history of Japanese-Chinese conference interpreters, and the notion of norms presented by Chesterman (1997) is used as a theoretical framework. The data collected by conducting life-story interviews are analyzed to illustrate the interpreters' values and beliefs, presumably fostered by their cultural and linguistic backgrounds.

The findings obtained from the study are twofold. First, interpreters tend to uphold two kinds of norms, namely "faithfulness" and "neutrality," as their guiding principles. Depending on the situation, however, the "internalized norms" such as communication adjustment take over and influence their practices. Second, such internalized norms seem to derive from interpreters' linguistic and social backgrounds, as well as values and beliefs formed by empirical interpretation practices.

1. はじめに　研究の目的と背景

近年の通訳研究においては、鳥飼（2007）、新崎（2010）のように、通訳者自身に焦点を当てた研究が見られるようになってきた。これまで通訳者の可視性/不可視性についての研究は多く見られたが、多くは解釈の違い、そして役割研究の範疇にとどまっていた感があった。

通訳行為には必ず通訳者の解釈という行為が伴う。そして産出される訳文にはどのような形式の通訳であれ、通訳者自身の主体性、そして通訳者自身の規範が多かれ少なかれ関わっている。通訳者の役割研究が進展する中で、通訳という行為の主体者たる通訳者の存在に焦点を当てることは至極当然のことといえよう。新崎（ibid）は、通訳者の「不変・不介入」原則からの逸脱行為を、通訳者が通訳という行為を果たすために行なうコミュニケーション調整という視点から捉え、「コミュニケーション調整」と通訳者の意識との関連性を、訳出分析と半構造化インタビューから分析した。

本稿ではこの先行研究をふまえて、通訳者の原則からの逸脱行為が生じる要因を通訳者

HIRATSUKA Yukari, "Oral History of Japanese-Chinese Interpreters: How Interpreting Norms are Fostered," *Interpreting and Translation Studies*, No.12, 2012. pages 69-82. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

の内的規範にあると考える。通訳者は通常、規範（規範研究において規範と呼ばれている規範、ここでは便宜上外的規範と呼ぶ）に依拠した通訳を行なうが、時には通訳者の内面に存在する規範（ここでは便宜上内的規範と呼ぶ）が外的規範を凌駕し訳出を行なう、との仮説を立て、この外的規範と内的規範をオーラルヒストリー・インタビューから導き出し分析する。本稿は日本語－中国語通訳者を調査協力者とし、通訳者の文化的・言語的背景や信条、思想などの価値観をインタビューデータより抽出し、通訳者の価値観と通訳規範意識との関連を探ることを目的とする。分析の枠組みとしては Chesterman の規範概念を援用する。

2. 先行研究としての規範研究

通訳翻訳学における規範研究の代表的なものとしては Toury (1995)と Chesterman (1997)が挙げられる。日本においての規範研究としては古野（2002）や水野（2007）、佐藤（2008a, 2008b） が Toury の翻訳規範を元に翻訳に関する理論的言説を翻訳規範抽出の指標として用いている。また山田（2008）は Toury の翻訳規範とブルデューのハビトゥス概念との交点を考察した新しい翻訳研究の分析枠組を模索した。

Chesterman (1997)は Toury (ibid.)の規範研究を踏襲し、翻訳規範を期待規範(expectancy norms)とプロフェッショナル規範(professional norms)に分類し、且つ professional norms を責任規範、コミュニケーション規範、関係規範という概念に分類した。その上で規範を制約するものとして 4 つの価値観（明晰性、忠実性、信頼性、解釈）を挙げて、それぞれが個別の規範に制約的作用を及ぼし、翻訳行為にあらわれる翻訳方略は規範の制約を受ける、と主張した（pp. 175-187）。Chesterman では規範を「外的なものと」として取り扱っているものの、翻訳者は規範よりも価値観の方を優先する場合があり、また翻訳規範は価値観を具体化したものであると述べ、翻訳者の規範の内在化に触れている（ibid.: pp. 172-173）。

Shiesinger (1989)は、Toury の翻訳規範をもとに通訳規範について述べた論考であり、通訳者の規範の内在化の問題や、通訳規範と通訳の場やテクスト等のファクターとの関連性にも言及し、通訳規範抽出の課題などを指摘した論考である。

瀧本（2006）は Chesterman の規範における「翻訳」を「通訳」と置き換えたうえで分析の枠組とし、オーストラリアにおけるビジネス通訳者への半構造化インタビューデータから通訳者の行動と倫理規定の関連を分析・検証した論考である。本稿でも Chesterman の翻訳規範概念を通訳規範と位置づけ、分析の枠組として援用する。

3. 本研究の位置づけ

中国においては 2006 年 9 月に国家品質監督検査検疫総局が国家標準としての「翻訳(通訳を含む）サービス規範」を制定、同年 12 月から施行されている。この規範の下で、通訳者は以下の条件に合致せねばならないと規定されている。

1. 国が定める部署の発行した通訳資格証を持つ者もしくは相応の通訳能力を備えている者

2. 通訳訓練受講経験者もしくは現在の受講者
3. 職業道徳を備えている者

国家標準名称に「規範」という語彙が使われてはいるものの、通訳者側の意見としてクライアント側に事前に十分な資料提供を行うことが記されている以外は、単にクライアント側からの、通訳サービスを提供するエージェントと通訳者に対する「期待規範」を文章化した内容になっていると言っても過言ではなく、これまでの「規範」に関する研究の知見はあまり取り入れられていない。

また、中国では 2007 年から専門修士として翻訳通訳専門の修士学位 (Master of Translation and Interpreting 略称:MTI)が新設され、理論と実践を組み合わせた訓練による人材育成が行なわれている。しかし、ここでも規範に関する研究の知見はあまり取り入れられていない。これは通訳規範の分析が実務者の側からなされていないことが原因とみられる。日本においても同様の状況にあり、今日の日本において、翻訳規範に関する研究は先述したように多数存在するが、通訳者の規範研究は未だ少なく、研究の発展が待たれる分野のひとつであるといえる。

実際の通訳者がどのような規範をもって「期待規範」に応えているか(または応えないのか)、そして規範とは異なる訳出をする背景には何があるのか等を浮き彫りにすることで、通訳者の行う通訳という所作と通訳者の役割を社会が(再)認識することにつながると考える。またグローバル化した今日の日本社会において、通訳行為の重要性を認識することは、今後の日本における通訳教育の方向性を再考することにもつながり、今後の日中間通訳コミュニケーションを考える上でも有益であると考える。

なお、通訳者の語りには「イーミック(文化内在的)」 の表現が多く使われ、本稿はこれらを主な分析対象とするため、当事者研究を行うことがより有効と考えた。

また、これまでの日本における通訳翻訳研究において、研究対象言語としての外国語は英語を主とする欧米言語が中心であり、中国語をはじめとするアジアの言語を対象言語とする研究は、近年『通訳翻訳研究』などで中国語母語話者による論考も多く掲載されるようになってきたが、その多くは翻訳(作品)もしくは訳語の選択などを主たる研究対象としており、日中間の通訳者を対象とした研究は未だ少ない。通訳者という「人」のオーラルヒストリーを研究手法に取り入れているのは、前述の鳥飼 (ibid.)をはじめとする日英通訳のみである。ゆえに本研究は日中間の通訳者を研究対象とした、通訳者による当事者研究として数少ない通訳研究になるであろう。

4. 研究方法

本稿は、オーラルヒストリー、口述史と呼ばれる研究方法を用いる。トンプソン(2002)が指摘するように、オーラルヒストリーは、現在に至るまで地域を問わず、また様々な分野の研究に使われてきた。江頭(2009, p.70)は、オーラルヒストリーは政治史、労働史、地域史などのように、歴史自体にフィールドワークの伝統が残っているところ、また学際的な交流がなされたところで

発展してきた歴史学的な研究手法であるとし、社会学的な研究手法を指す場合はライフヒストリー、もしくはライフストーリーと表記するという、日本における両者の相違点についても言及している。ヤウ（2011, pp.22-23）は、オーラルヒストリーは「テープに記録された回想」「タイプ打ちされた口述記録」「綿密なインタビューを伴う調査法」のすべてを指す、と定義し、例えばライフストーリー、ライフナラティブなども、理論家の提唱する定義は一般的でなく、これらの用語はオーラルヒストリーと同義に用いられている、という立場をとっている[1]。

通訳者のオーラルヒストリー研究としては、戦後日本の日英通訳者のオーラルヒストリーから通訳者の役割をブルデューのハビトウス等の概念から分析・考察した鳥飼（ibid.）が挙げられるが、鳥飼が言及したように、通訳という仕事は話し手と聞き手が存在してはじめてその発話が意味を持つため、通訳者自身の声がそのまま取り上げられることはなく、通訳者の発話はその個人のものと見なされることはない。また、中国語と日本語間のこれまでの通訳者を例にとってみても、現在は中国の要職にある元外交通訳者である劉徳有[2]、王効賢[3]などのインタビューは書籍や回顧録として残っているものの、現在第一線で通訳現場に立っている通訳者たちの声が世に出る機会はなく、現役通訳者の語りから規範意識を分析した研究も今のところ見あたらない。

本稿の研究方法にオーラルヒストリーを選択した理由としては、形式的な構造化インタビューでは表層のことば、建前のみに終始してしまう可能性を危惧したことが挙げられる。トンプソンは記憶の過程について「個人の理解だけでなく、個人の関心の影響も受けている」（2002, p. 237）と述べているが、語りが建前のみに終始してしまう可能性を少しでも軽減するために、個人の半生という記憶の過程を辿ってもらうオーラルヒストリー研究は、人生の一部として「通訳行為」を振り返り、その行為の規範を浮き彫りにするのに妥当であると考えた。

分析手法としては、発話全体の文脈を理解したうえで分析するという姿勢、すなわちシークエンス分析を基本とした。これはフリック（ibid.：p. 245）の言う「分析の発話をカテゴリー化して配置しなおしたり、理論を作ったりしてゆくうちに、徐々にテクストの全体としての形が見失われる傾向がある」ことを避けるための選択である。

4.1 調査協力者

調査協力者はいずれも日本語-中国語会議通訳者である。A、B、C の各氏は中国語母語話者、D 氏は日本語母語話者である。プロフィールはインタビュー時（2008 年～2011 年）のものである。通訳者の選択方法は「機縁法」（桜井, 2002）を用いた。

A 氏－女性、30 代後半。母語は中国語。中国北京市生まれ。大学での専攻は日本語。インハウス通訳を経て来日後フリーランス通訳者に。会議通訳歴は 8 年。

B 氏－男性、40 代前半。母語は中国語。中国江蘇省生まれ。英語教師を経て大学の日本語学部へ入学。大学院修了後、大学講師、日系民間企業などのインハウス通訳者を経て、現在はフリーランス通訳者。会議通訳歴は 7 年。

C 氏—女性、40 代前半。母語は中国語。中国北京市生まれ。大学での専攻は日本語だ

が日本留学時に選択した専攻は歴史学。中国に帰国後、通訳業者に登録し 1996 年から通訳者として稼働開始。現在は研究者、教育者としての活動が多く、通訳は月 2 回程度にとどまる。

D 氏－女性。40 代後半。母語は日本語。東京都生まれ。中学時代から中国語の学習を始める。大学時代の専攻は中国文学。大学卒業後、中国の大学へ 2 年留学し、帰国後、通訳者として稼働を開始。一時期は通訳の仕事を中断し、気象協会に務めた後、再びフリーの会議通訳に従事。気象予報士や防災士の資格を持つ。通訳歴は約 20 年。

4.2.インタビュー設問

筆者が事前に用意し、調査協力者に送付したインタビュー設問は以下の通りである。

①通訳者になるまでの貴方のこれまでの経緯をお教え願いますか。
②TL（目標言語）をどこで何年学びましたか。
③通訳訓練を受けたことがありますか。それはどこで、何年学びましたか。
④現在までの通訳歴は。
⑤現在行っている通訳の形式と頻度を教えてください。
⑥仕事を受ける際の判断基準はありますか。
⑦対面通訳の現場において二者の間で通訳者はどのような立ち位置にあると思いますか。
⑧通訳の現場で文化的差異を感じることはありますかその場合、訳出の際、どのように対処しますか。
⑨通訳する場の違いにより通訳者の役割の違いがあると思いますか。
⑩貴方にとって通訳者の規範とは何ですか。
⑪貴方が考える通訳者の役割とは何ですか。

この設問はインタビューの了解を頂いた後に調査協力者へ事前にメール添付にて送付した。実際のインタビューは筆者が各協力者の指定した場所に赴き行なった。当日は設問や時間にはこだわらず、協力者が自由な語りを行えるように配慮しながら進めた。

5. インタビューデータの分析

5.1 文化の概念と規範

A 氏は語りの中で、日中両国は同文同種であるとの日本人の誤解が日中間の円滑な異文化コミュニケーションを妨げている例を挙げ、「コミュニケーションは取れるだろうけれど、根本的には理解し合えないと思いますけど・・・・・・、全然違う国民性だから」と前置きした上で、ことばに表れる文化的差異を通訳する難しさについて以下のように語った。

（以下調査協力者は各アルファベットで表記し、H は筆者とする）

A：あんまり全然自分が部外者みたいにただことばを訳すだけでは、やっぱり双方なかなかかみ合わないところが多いと思うんですよ、できるだけ中立ではありながら、なんて言う

んだろう、・・・・・・皆の両方のために、できるだけこう・・・・・・特に商談の時はそうですね。

A:そうですね、ただことばだけだと両方とも一方通行で平行線で終わっちゃうんで、なかなか交差できない、接点がないまま終わってしまう、それはそこまで通訳者に求められていないのだろうけれども、その現場では、自分がいる現場で早くこの話しがまとまって欲しいとか、そう言う気持ちがあると思うんですよね。それで少しこういう。

（中略）

A:日中よりも日英の方が近い文化的差異というか、お互いに理解している部分が大きいよね。

H:それって日本側が結構理解しているということに由来しないかしら、日本側が欧米文化を。

A:日本側が欧米文化を理解している部分も大きいし、理解しようとする部分も大きいよね。逆に日中の場合だともう国が近いから同じなんだろうという思い込みから理解しようとする気持ちが薄いと思うのね。最初から同じでしょという先入観が。逆に全然そこが違うんですよね

H:近いし、同じアジアの国っていう。

A:同じルーツって言うか、文化的ルーツがつながっているから同じ考え方だろうって言う先入観が強いって思うんですよ、特に日本人の中では。中国人は、どうかな、中国人は多分それはないと思いますね。

（中略）

A:そうですね、その問題の話の、言葉で伝えるのと本質が伝わるかどうか、通訳の仕事としてはことばとして伝えているんですけれども、その本質はどこまで・・・・・・。

A氏の語る「ことば」と対比する「本質」とは、通訳者が伝えなければならないと考えている「ことば」の深層にある文化の概念とも考えられる。その「本質」を伝えなければ、という通訳者の規範意識と、現実に起こりうる聞き手（日本人）の誤解に満ちた先入観とのギャップにジレンマを感じているように見える。これは「ことば」の表面に現れた情報を伝える訳出と、本来伝えるべき深層にある「本質」を訳出する行為を対比させ、「本質」を訳すべきだという潜在的な通訳規範を有していると考えられる。

また、A氏のインタビューからは、通訳者は「中立」であるべきという職業規範が浮かび上がった。そしてそれはクライアントが同様に通訳者に対して期待するところだとも語っている。また、日本と中国は価値観が全く違うためにわかりあえないことを前提にした上で、「表層のことばにあらわれたものではなく深層にある意味を伝える」ことが通訳者としての役割であると考えている。これはコミュニケーションを取り持つと言う規範が、職業規範である「中立」という規範を越えて訳出行為にあらわれていることを示すものととらえられる。

5.2 忠実な訳出と責任規範

通訳の立ち位置に関する質問に対し、B 氏は自身の立ち位置を以下のように語りながら、

自身の通訳規範にも言及した。

H:でも通訳者の立ち位置として、真ん中なのか、もう少しお客さんよりなのか。例えば話の内容によっては、こちらに偏るのか。
B:はい。そうですね。基本的にはニュートラルですね。私は、もちろんお客さんからお金をいただくわけですが、忠実に正確にお互いに言っていることを訳す方が、一番自分にとっても無難ですし、お客さんにとってもそれが判断材料になるんです。
H:ええ。
B:最近の動向ですが、実は企業の依頼が多いんですね。本当は大手企業の場合は通訳、インハウスを多く採っているんです。商談の場合も多いんです。商談ですと本当はインハウスが内部の事情を知っていますから、その人達にやらせた方がいいと思うんですけれども、それでも、企業からの依頼が増えているんですよ。やはり内部の人間ですと、相手の話を自分が勝手に解釈して、通訳する、またこちらの話を自分の判断を入れて通訳してしまいます。それで、話がこじれてしまう。
(中略)
B:例えば自分が、クライアントが言った言葉で、あれ、と思った言葉はその場で確認してから、こういう意味ですかと確認するそれで伝えるようにしています。で相手方が言った言葉は、そのまま伝えた上で、こういっておりますが、もしかしたらこうとらえているのかもしれませんということはあります。
H:確認で。
B:でも遮ったり、とかはしません。直接訳します。
H:忠実に。
B:忠実に。
H:フリーランスとしては言葉に忠実であるべき?
B:そうです。
H:ではインハウスの人は?
B:やはりインハウスのひとは、私も自分が○○電機にいましたから、わかりますけど、自分の考えていることを伝えたいんですよ。知っている情報を伝えたいんです。そういうなんか、ありますね。
H:通訳者の役割以外を果たしたい。
B:その方が会社の利益になる、果たしたいと思うんですよ。

B 氏は自身の規範として「基本的にはニュートラル(中立)」を挙げた。またそれがクライアントの期待規範とも共通するとの認識を持っており、中立でない通訳者に対する不満をクライアントの発言に重ねて幾度も言及した。これはそれまでの長いインハウス(企業内)通訳者時代に感じていたと思われる「非中立」の通訳に対する自己矛盾やストレスがその背景にある可能性を示している。

しかしながら、B 氏は自身の語った忠実、中立の立場と相反する語りも残している。

B:はいはい。ついこのまえもありましたね。日中韓の有識者会議で、そうそうたるメンバーが集まった会議で、中国のある作家がスピーチをして、かなり日本にとって失礼なスピーチをするんですよ。
H:说骂人的话。(訳:侮辱した話、の意)
B:そう、侮辱に近い発言の仕方をするんですね。でも同時通訳ですから。そのまま訳したんですけれど。
H:ああ、同時だったんですか。
B:さすがにののしる言葉は和らげて、訳しましたけれど。

B 氏は、直訳すると誤解を生じる言葉は目標言語の文化に合わせて訳出し、明らかな侮蔑の言葉は和らげて訳す、とも語った。これは実際の通訳現場においては、B氏の「忠実」、「中立」の職業規範よりもコミュニケーション規範が優先され、訳出にあらわれたことを意味するものであると推察できる。

5.3 経験をもとに変化する規範

C 氏は自身の失敗談を交えながら、自身の規範に関して以下のように言及した(インタビュー本文は中国語、翻訳は筆者による)。

C:私が当時通訳を教えていた時は「現場の空気になれ」と受講生に教えていました。スピーカーの発言は必ず訳さねばならない、しかも忠実に。でも自分の意見は述べるな、と。空気であるべき、と。これが原則です。ただ私自身は若い頃はクライアントの利益を守ることを第一義と考えていました。
H:クライアントの利益を守る・・・・・・。
C:ですので、それで失敗もしました。通訳を続けることができなくなったケースも2件ほどありました。(中略)それからは自分の考えを入れないで、と肝に銘じました。通訳者は空気なのです。今は空気を越えるようなことはしません。

C 氏は自身の通訳規範は「忠実」で「空気になること」と明言した。C 氏のいう「空気」ということばは、語りの文脈から「透明な存在」のメタファーとして用いていると推測できる。しかしながら、C 氏は「忠実」や「空気であれ」という通訳規範は、多くの通訳経験を積んだ現時点での規範であり、かつてはクライアント寄りの通訳、また自身の考えを反映させた通訳をしていた、と続けて語った。そして、失敗を経たのちに「スピーカーの発言に忠実」で「現場の空気」のように透明な存在であるべきとの規範が形成されたと話した。

これは通訳訓練を全く受けず(当時中国には通訳訓練を受けられる機関は存在しなかった)、通訳の現場で経験を重ねながら、自身の中で調整をしていく中で規範が内在化されて

いったことを示している。

また C 氏は、日中間の政治家の対面通訳の場で、その場の雰囲気を盛り上げるために「忠実にではなく大げさに訳出した」例を挙げ、それがクライアントの評価を受け、その「訳出は適切だった」と肯定した。

> C:その場にいた人はみんな政治家 F 氏夫人のことが気に入ったんです。F 氏はちょっと亭主関白なところがあって、皆で「K さん(F 氏夫人)、これからは食事の注文も、貴女の言うことを聴いて、F 氏の言うことは聴かないことにするよ」ということを話していました。するとF 氏が、「僕、悲しいよ」と言ったので、それを私は「太欺负人了。(註:ひどいいじめられようだ、の意)」と訳しました。当時は特に意識しなかったのですが、それは、生活感覚からいって、実は「とてもうれしい」なんだと。F 氏は多分そんな心境だったのではないか、と思ったのです。そうしたら当時大使館に勤めていた D さんが、
> H:ああ, D さん。
> C 氏:そう、大使館の D さんが「これは私が聴いた中で一番いい通訳だ」とほめてくれました。D さんも中国語を勉強した方なのでね。あのとき「我要哭(註:私は泣きたい、の意)」とやってはダメだし、「我很悲伤(註:私は悲しい、の意)」ではもっとダメ。なので、これは工夫とかいう簡単な問題じゃない。言うなれば、生活感覚がないと。例えば相手には相手の言葉があり、私には私の言葉がある。人それぞれの言葉があるんだけど、そのことを充分に理解できたときに、これらの言葉が自分にとってとても自然なものになり、相手にとっても自然に聞こえる。これがたぶん「通訳者の規範」なんだと思います。

この C 氏の語りは、職業規範よりもコミュニケーション規範のほうが優先され、同時にクライアントの期待規範にも応える結果となった一例と見ることができる。通訳者は、その場のコンテクストから判断し、オリジナルの文を超えた訳出をすることがあるが、「我々はある規範に従わなければいけない。その規範とは、私が思うに誠実であること、それはクライアントに対しても同じ」とC氏は続けて語った。このことから、C 氏は自身のオリジナルを超えた訳出を肯定し、前述の「忠実」や、後に語った「誠実」という通訳規範にも矛盾していないととらえていると推察できる。

5.4 忠実性を越える円滑なコミュニケーションという目標

日本語母語話者の D 氏は、忠実な通訳は「当たり前」で、「できなければいけない」としたうえで、コミュニケーションを円滑に行うために、忠実を「第一に考えていないかもしれない」自身の訳出姿勢に言及した。

> D:その場にいる者として。うん。まあ、だから、橋渡しでもないですけど、仲立ちとして両方の言葉を分かるのは、もし1人しかいないのであれば、お互いに喧嘩しないでくださいよ、みたいなところがあるのかもしれないですね。
> H:そうですね。ふーん、そうですか。

D:うん。確かにね、だから、忠実ということを第一に考えてないかもしれないです。で、聞きながら、逐次の時とか、聞きながら「なんて言ったらいいかなあ」っていうのを、やっぱり考えているところがありますね。

H:それは、たとえば、わかりにくいっていう発言の場合・・・・・・。

D:あ、わかりにくいとか、わかりにくいとか失礼だとか、そういう時。わかりにくいもありますね。わかりやすい言葉・・・・・・わかりやすいっていうのも、こう、雰囲気の良さにつながるじゃないですか。

H:ああ、確かにそうですね。そうですね。

D:だから、効率は・・・効率よく進むっていうのも、やっぱり雰囲気がいいほうが、効率がいいですよね。

（中略）

D:出版通訳とかだったら、忠実のほうがいいかもしれないですけれども、

H:うん、そうですね。

D:でも、人と人とが何かを、こう、交流する場であるならば、やっぱり場をよくするっていうのが、自分でできる範囲でできるのであれば、ということを考えているかもしれないですね。

H:それってやっぱり、あの、なんていうんですかね、その「両国の関係をよくしたい」っていう大前提があるんじゃないですか？

D:そうなんですよね。で、あともうひとつは、忠実っていうのは、できて当たり前だと思うんですよ。だから、内容は全部ちゃんと盛り込んだ上で・・・・・・できているかわかんないですけれど、でも、その上で、その関係をよくできるような、雰囲気をよくするようなやり方にするということができればいいんじゃないかなと思いますけどね。

ブルデュー（1988, p. 22）は、行為者はその実践において、「行き当たりばったりの行為をすることは稀で、大抵の場合は『なすべき唯一のこと』をなす」と述べ、その理由として、「現に身を置いた条件と類似の条件に身を晒し続けることから産出された『実践的感覚』の直観に身を委ねることによって、行為者は、世界の流れの中に内在する必要性を先取りする」（loc.cit.）と述べている。

D 氏の語りからは、忠実な訳出は最低限の規範であり、忠実性の保持＝内容を全部盛り込む、という行為は果たした上で、過去の通訳経験や自身の価値観などにより産出された「その場の雰囲気保持、円滑なコミュニケーションの達成」という通訳行為の目標が、自身の規範としてすでに内在化され、この内的規範にもとづいた訳出を行いたいと願う姿勢が垣間見える。

6. 考察

紙幅の関係上、本稿で挙げた語りはオーラルヒストリー・インタビューのほんの一部である。4名の通訳者ともそれぞれの半生を口述していく中で、「通訳者としての規範は何か」という問いに対し、まずは通訳者としての外的規範と考えられる「中立」「忠実」に言及した。しかし、話

を進めるうちにその規範からは逸脱した各自の規範に基づく訳出行為にそれぞれ言及した。

A 氏はこの外的規範からの逸脱行為については「できれば避けたい」と否定的見解を示したが、B 氏、C 氏ともにこの逸脱行為を否定的にはとらえておらず、Chesterman による職業規範の下位概念である責任規範、コミュニケーション規範に基づく当然の行為ととらえている向きがあり、両氏の語りからは、これらの行為が外的規範に矛盾するものだとは考えていないようであった。これは通訳訓練を日本で受けた A 氏、中国でマンツーマンの訓練を受けた B 氏、そして通訳訓練を受けていない C 氏の背景の違いが原因であると考えられる。

しかしながら A 氏と同じく日本で通訳訓練を受けている D 氏は、「忠実」は最低限の「できて当たり前」のものととらえ、その上で「関係をよくできるよう」に、円滑なコミュニケーションの場に調整していくことが通訳者としての規範であると考えており、Chesterman の論考では職業規範の下位概念であるはずの責任規範とコミュニケーション規範が、いずれも同等の概念として内的規範として現れていることを示唆する結果となった。

また 4 名の共通点としては、各人ともに毎回異なる（はずの）クライアントの期待規範を充分に理解し、且つその期待規範に則った自身の果たすべき役割を理解した上で、異なる現場において職業規範に則り、訳出を行なっている点が挙げられる。また、どちらの言語に訳出するにしても、通訳者は訳出の際には両文化の差異を考慮した訳出を行なっていることも語りからうかがえた。

このような規範意識は、ポェヒハッカー（2008）が論じたように、通訳実践における「自分の訳出物やパフォーマンスに関し通訳者が持っているある種の期待に対する通訳者自らの気づきとその期待を満たそうとする行為」（p. 158）に直接影響を与えるものであることが示唆される。インタビューの結果から、通訳者はその役割を果たすために、職業規範の下位概念である責任規範、コミュニケーション規範、関係規範に基づき、規範を内的規範として咀嚼した上で訳出の内容を決定し、訳出行為に臨んでいると考えられるが、上述した D 氏のように、Chesterman の規範概念がそのまま当てはまらないと思われるケースも見られた。

通訳者のオーラルヒストリーの先行研究である鳥飼（ibid.:p.378）では、通訳者は「『黒衣』としての役割を果たす中で、共感と情熱、そして強い意志と洞察に支えられ、自身の判断で自立的に創造性に富む決定を下している」と述べられているが、今回のオーラルヒストリー・インタビューからも、まさに自身の内在化された規範に則った判断で訳出行為に臨んでいる通訳者像が浮かび上がった。

また新崎（ibid.:p.262）は、「通訳者は『不変・不介入』をそれぞれのやり方で解釈し、コミュニケーション調整方略に基づいて独自の通訳ストラテジーを開発していた」と述べているが、本稿からも、通訳者は「不変・不介入」や「忠実」「中立」という外的規範を原則としつつも、通訳行為を行うそれぞれの場によって「コミュニケーションの調整」を行うという通訳者の内的規範が外的規範を越えて重要視され、訳出への影響を及ぼすことが明らかとなった。また、今回のインタビュー結果から、通訳者の内的規範形成には、通訳者個人のこれまでの言語的、社会的背景、価値観やこれまでの通訳業務を通した経験則などが影響している可能性を垣間見ることができた。

7. おわりに　今後の課題として

今回はオーラルヒストリー手法を用いて、語りの表層だけでなく、その語りが調査協力者である通訳者によってどう語られたか、という点にも着目した上で分析を行った。しかしながら内的規範と価値観の関係を検証するには不十分であった。今後、分析手法を再度検討し、より詳細なデータの分析を行なうことが必要と考える。

今後はより多くのオーラルヒストリーのインタビューデータを QDA(質的データ分析)ソフトを用いてコード化分析を行い、インタビュースクリプトから浮き彫りになる規範意識を解析することも試み、訳出分析と組み合わせて検証していく予定である。

ブルデュー（ibid.）の訳者、石崎晴己は「彼（註：ブルデュー）が心がけるのは、理論の構築をするに際して、理論というものの持つ隔り（主知主義的隔り）の自覚を、言い換えるなら『理論と実践のずれに関する理論』を、当の理論のなかに組み込むことである」（p. 326）と述べている。これを通訳行為に当てはめるならば、「理論」と「実践」を「外的規範」と「実際の訳出行為を裏付ける内的規範」ととらえることができよう。本研究の次の段階として、ブルデューの知見を援用し、「理論と実践のずれに関する理論」を通訳理論に取り込んでいくことを目指していきたい。

【謝辞】

本稿は 2011 年 9 月 11 日神戸大学で開催された第 12 回日本通訳翻訳学会年次大会における口頭発表の内容を大幅に加筆、修正したものである。貴重なコメントを頂いた参加者の方々、そして、本稿の調査協力者である通訳者の方々に衷心より感謝申し上げます。

……

【著者紹介】

平塚ゆかり（HIRATSUKA Yukari）立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程在籍　フリーランス中国語通訳者・翻訳者　アイエスエス・インスティテュート東京校中国語通訳コース講師

……

【註】

1．本稿ではヤウの定義に従い、当該手法をオーラルヒストリーと呼ぶことにするが、これらの定義にはさまざまな論が存在する。桜井（2002）の対話的構築主義をもとに論を展開した石黒（2012）は、ライフヒストリーとライフストーリーの違いについて言及し、ライフストーリーを「必ずしも人生全体の語りというわけでなく、人生の一部分、一局面についてインタビューを受ける人びとが選択的に語るものの集積であることが多い」（pp.178-179）と定義している。この定義に基づけば、本稿は通訳者のライフストーリー研究であるといえよう。

2. 劉德有（1931～）中国遼寧省生まれ。光明日報日本特派員記者、中日友好 21 世紀委員会中国側委員、中国翻訳工作者協会（現・中国翻訳協会）副会長などを歴任。北京大学兼任教授。1986 年より中国文化部副部長。日中間における外交舞台で通訳を務めた。

3.王効賢（1930～）中国河北省生まれ。北京大学日本語学科卒業。中国外交部アジア局処長、

中国翻訳工作者協会（現・中国翻訳協会）副会長、中国人民対外友好協会副会長などを歴任。日中間における外交舞台で通訳を務めた。

【参考文献】

Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Shlesinger, M. (1989). Extending the theory of Translation to interpretation: Norms as a Case in Point. *Target* 1(1): 111-115.

ブルデュー, P.（1988）『構造と実践：ブルデュー自身によるブルデュー』（石崎晴己・訳）藤原書店

江頭説子(2009)「社会学とオーラル・ヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会学研究とオーラルヒストリー』(pp.69-103)お茶の水書房

フリック, U. (2002)『質的研究入門：〈人間の科学〉のための方法論』（小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子・訳）春秋社［原著：Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Reinbekbei Hamburg Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.］

古野ゆり（2002）「日本の翻訳：変化の表れた 1970 年代」『通訳研究』2 号 (pp.114-122) 日本通訳学会

石黒武人（2012）『多文化組織の日本人リーダー像：ライフストーリー・インタビューからのアプローチ』春風社

水野的（2007）「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相－直訳の系譜」『翻訳研究への招待』 pp.3-43.（日本通訳学会翻訳研究分科会）
［Online］http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol1/02_vol1_Mizuno.pdf（2012 年 7 月 28 日）

ポエヒハッカー, F.（2008）『通訳学入門』（鳥飼玖美子・監訳）みすず書房［原著：Pöchhacker, F.（2004）. *Introducing interpreting studies*. London & New York: Routledge.］

桜井厚（2002）『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房

佐藤美希（2008a）「昭和前半の英文学翻訳規範と英文学研究」『翻訳研究への招待 2』pp.11-38. 日本通訳学会翻訳研究分科会編）

佐藤美希（2008b）『英文学翻訳の翻訳規範に関する一考察—『英語青年』誌に見られる英文学研究、及び社会思潮との関係から—』北海道大学博士学位取得論文［未刊行］

新崎隆子（2010）『通訳者のコミュニケーション調整仮説—英日逐次通訳の事例から—』青山大学大学院国際政治経済学研究科博士論文［未刊行］

瀧本眞人（2006）「AUSIT 倫理規定と通訳者の行動: ビジネス分野におけるダイアログ通訳の場合」『通訳研究』6 号 (pp.143-154) 日本通訳学会

トンプソン, P.（2002）『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』（酒井順子訳）青木書店.［原著：Thompson, P.（1978/2000）. *The voice of the past: Oral history(3rd ed.)*. Oxford & New York: Oxford University Press.］

鳥飼玖美子（2007）『通訳者と戦後日米外交』みすず書房

Toury, G. (1995). Descriptive translation studies and beyond. Amsterdam: John Benjamins.

山田優（2008）「規範、ハビトゥス、ローカリゼーション」『翻訳研究への招待 2』(pp.121-132).日本通訳学会翻訳研究分科会

［Online］http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol2/08_vol2_Yamada.pdf （2012 年 7 月 28 日）

ヤウ，V. R. （2011）『オーラルヒストリーの理論と実践』（吉田かよ子・監訳・平田光司・安倍尚紀・加藤直子・訳）インターブックス［原著：Yow,V.R.（2005）. *Recording Oral history: A Guide for the Humanities and Social Sciences, Second Edition.* Lanham, Md: Altamira Press.］